

2020.12.1

現代俳句千葉

139号

巻頭エッセイ

俳号の思い出

幹事 岡田 春人



俳句を発表するとき、本名の人と俳号の人に
分かれる。私は俳号を使う。初め、えらそ
うに一人前になったつもりかと言われそうだ
た、俳句を詠むのは別人格だとわりきりた
かったからで、特別なこだわりはない。

三十数年使用してきた俳号「良允」を「春
人」に変更したのは、そんな時期の気分だったからである。

定年になり、何か俳句でお役に立つことがあればと考えていたとき、
地元柏で、田中喜翔さん（「月の匣」同人）が、「小半」句会を立ちあ
げるといので、その幹事の一人となり近所の鳴戸奈菜先生を指導選
者にお迎えした。半年ほどして奈菜先生から、句会の名称「小半」を
変えてはどうか、例えば「結」はどうかという話があった。喜翔さん
も同意して「結」に変更した。

そこで私も、気分一新、新たな決意で俳号を変えようと思いたった。

「把留人」で、一度句会に出してみたところ、もどの方が良いなどと評
判が悪かった。奈菜先生も苦笑いしながら、私が選んであげるから候
補の名をいくつか持つて来なさいということになり、いくつか示すと、
どれもばつとしない。結局、この名の人はいないから、春人にしなさ
いと決まった。

それから、長いこと所属していた結社を辞め、現代俳句協会に入会
した。自由で新しく、自分の納得できる自分の句をめざし、春人の俳
句人生が始まった。今まで、飯田龍太の山頂をめざして登っていたの
を、六合目あたりから、誰も登ったことのない隣の山頂をめざすこと
になったようなもの。

それから十余年が過ぎた。名前負けしているわけではないが、春人
はまだ七合目あたりをうろうろしているようだ。体力、気力のあるう
ちに、九合目あたりまで登りたいものだ。そして春人の句だとわかる
句から、誰の句かわからない句の境地に入りたいものである。希少な
俳号の力を信じて。

目次

俳号の思い出 岡田春人	1
秋の吟行会	2~4
新会員・会友紹介	4
令和3年度俳句大会作品募集	4
諸家近詠	5~7
会員・会友の近況	6~7
私の感銘句	8~9
津田沼研究句会報告	10
青葉研究句会報告	10
柏研究句会報告	11
君津研究句会報告	11
ひろば・図書紹介・掲示板	12

千葉県現代俳句協会会報

秋の吟行会

潮騒パーク「稲毛海浜公園」

会場 稲毛記念館（公園内） 二階大広間 令和二年十月二十九日（木）



花の美術館前でお出迎え

総武線稲毛駅で下車。次から次に車窓に映る団地を過ぎると間もなく集合場所の花の美術館バス停。美術館前には吟行会の幹事の方々が、千葉現俳の青い小旗を振ってお出迎え。三密を避けて全員マスクをつけてはいるが、

久しぶりの再会がとても嬉しい。コロナ禍の開催とあり、細心の注意を払いながらの吟行会である。今回は例外的に欠席投句も薦められ、総勢五十三名の参加。十一時までには受付を済ませ、密集を避けて、おのおの自由に散策開始。今日は秋晴、快晴。気持がいい。花を愛でるもよし。浜へ出るもよし。

白砂の広がる東京湾沿岸の稲毛の浜は国内初の人工海浜。沖に船を碇泊させ、きらきら輝いている。この一帯は高度成長期の昭和三十年代、埋立造成が行われ、宅地や公園、施設など都市型機能の充分備わった所である。広い。とにかく広い。ヨットハーバーや十四種を要するプールもあった。



海星庵



稲毛の浜



花時計

秋桜をそよがせた花の美術館前では、ハロウィーンの道化師たちに混じり、車椅子でご参加の千葉さんご一行も。奥にはエキゾチックな雰囲気温室。葉っぱが分厚い。作り滝も四阿もある。ロードガーデンへ抜け花時計へ。針は止まったまま。秋蝶は満載の花に狂おしげ。青空の下で食べるおにぎりの美味しいこと。閑静な松林を抜け、句会場へと急ぐ。

稲毛記念館は稲毛ニュータウン造成事業の完成を記念して作られた。埋立前の写真や、文豪たちの足跡は貴重な資料である。句会場は二階の大広間。ここでも消毒をして嘔吐の二句を一時半までに提出し清記が進んだ。

司会は高橋宗史副会長。選句の前に並木邑人会長より「今日は絶好の吟行日和でした。コロナ騒動で、総会も春の吟行会も中止になりましたが、今日は皆さんのご助力の甲斐あって、無事吟行会が行われたことを喜びたいと思います。」と挨拶があった。今回は選句まで解散、披講省略。選句集計には会長始め、幹事数人が残った。（結果は翌日、高橋宗史副会長より参加者に速やかに郵送された。）展望台から見る日本庭園や茶室の端正さ、東京湾を楯とした緑と水辺の調和を堪能した。

写真撮影・岡田春人・高木一恵
皆様、お疲れさまでした。（木之下みゆき記）

- 〔一〇十五位入賞者作品〕（二句のうち一句掲載）
- ① 足跡は記憶の深さなぎさ秋 黒澤 雅代
 - ② そつと置く檸檬水平線うごく 高橋 健文
 - ③ 花時計晩年ゆつくり見えてくる 岡田 淑子
 - ④ 花野より男が押せるペビーカー 星野 一恵
 - ⑤ 色鳥の水を濁さず翔ちにけり 宮下 奈緒
 - ⑥ 日時計のうすれし目盛冬に入る 保坂 末子
 - ⑦ 夜は星を曳く底曳船に木の実 石井紀美子
 - ⑧ 山茶花や海見ゆるまで歩きけり 阿部さくら
 - ⑨ 晩秋の浜にて我も真砂なる 下村 洋子
 - ⑩ 秋思裏返す波音は平ら 松本 千花
 - ⑪ 雁来紅多少の気取りと気の強さ 加藤 法子
 - ⑫ 向日葵のたねや平和な言葉たち 高木 一恵
 - ⑬ 深呼吸ひそとわれもす十月桜 山崎 幸子
 - ⑭ 致死量の愛はないけど秋薔薇 羽村美和子
 - ⑮ 脚たたむ釣瓶落しのパイプ椅子 里見 さち

〔特別選者特選句〕

(並木邑人会長 特選)

秋の浜詠嘆の「けり」の寄せにけり

東 國人

(高木一恵副会長 特選)

落葉の絨毯みんなあつまれば楽し

小林 実

(高橋健文副会長 特選)

足跡は記憶の深さなぎさ秋

黒澤 雅代

(高橋宗史副会長 特選)

によつぱりと秋空はるか風の塔

山崎 幸子

(徳吉洋二郎幹事長 特選)

そつと置く檸檬水平線うごく

高橋 健文

〔その他作品〕(二句のうち一句 受付順)

貝殻の晒され松の色変へず

片岡伊つ美

小春日や園のすみずみ一万歩

岡田 春人

八千草や百年先の花時計

川島 里子

GOTO吟行十月の浜真つ白

伊与田すみ

こんな日もあるさ十月桜ほつ

上野 紫泉

空も海も願つたり叶つたりの秋

増田 豊子

彩りの桜もみどとさちひとつ

岡崎 翠

十月ざくら視野の涯は炎なり

池田 博臣

寒波来る杭になるには邪魔な胸

千葉 信子

秋深し昔江戸湾波を聴く

吉野 精

秋うらら潮の匂ひの吟行会

加藤 春草

波たたむ白い砂浜新松子

笈沼 早苗

十月桜はるか海と対峙せり

高橋 宗史

思い出の童謡をきく里の秋

宮野 遊子

レンガ積む天竺草の紅が濃い

五味ちひろ

歩かねば歩けなくなる秋の風

川又 優

秋の潮花時計にある荒びかな

越野 雄治

打瀬網曳く面差しに一つ柿

徳田 悠子

海はもう秋また一つ齡をとり

森井美恵子

池畔にて読書の翁菊日和

山崎 和久

秋日燦南極の石に突き当る

木之下みゆき

秋の森命に話しかけられる

三宅たくみ

マスク無く正面向けぬ天女像

高橋 博

秋の天サーファー誘う波の屋根

平岡 育也

コロナの世少し離れて秋の薔薇

徳吉洋二郎

霜降や困難耐ゆる海がある

吉田 耕史

靴底にからむいなげの秋の砂

野口 京子

草木零落す公園は笑つてる

細野 一敏

溟海を来し白砂や飛来鴨

重田 忠雄

石二三投げて水輪の麗けし

大澤ひろみ

コロナ禍の孤島にあらず秋の浜

並木 邑人

団栗落つ幽し音や浜の昼

横山 郁子

天高し絵本はみ出す稻毛浜

金子 未完

秋の七草皆ワクチンを待つており

鈴木 瑩子

日の破片思う存分秋の海

加賀谷秀男

低く咲くコスモスババの子守歌

大藪 智子

特選句を含む作品評

並木 邑人

秋の浜詠嘆の「けり」の寄せにけり 東 國人

特選に選んだのは、当日仕事で欠席した東

國人さんの作品だった。東さんは吟行会の企

画責任者として下見等に携わっており、海岸

の様子も熟知している筈だ。寄せる波が「け

りけり」と呟いているという句だが、「切れ」

ではなく詠嘆と断じたところ、締め「けり」

もユーモラスで効果的だった。

高木 一恵

特選に戴いた小林実作品は「落葉の絨毯」

を配して、下句の感慨に実が籠もりました。

夜は星を曳く底曳船に木の実 石井紀美子

右は園内和船の囁目。「星を曳く」が底引き

を止めた歳月、「木の実」が展示された船の

姿を詩情豊かに表現しています。他に二句、

海はもう秋また一つ齡をとり 森井美恵子

ハマシギのぬき足さし足影つかむ 保坂 末子

高橋 健文

私が特選に頂いたのは、〈足跡は記憶の深

さなぎさ秋〉。当日のあの海岸の砂は眩しい

くらいに白かったが、噂によると、オースト

リアから輸入したものらしい。それはとも

かく、砂浜に残る無数の足跡には、それぞれ

の深さがあり、それぞれの歩みが刻まれている。

季語「なぎさ秋」と相まって、思いのこ

もった一句に仕上がった。

高橋 宗史

特選句では先ず「によつぱり」という擬態

語に注目した。作者の造語か。発見がある。



選句中



稻毛記念館

聞き慣れぬ語は「によきによき」「のつば」を連想させる。晴天の秋の空。漂う空気を巧みに表現。「風の谷のナウシカ」の物語を思わせ楽しい。古い？ 他の三句は伊与田すみさん、細野一敏さん、黒澤雅代さんの句。独自の発想と表現の適格さに打たれました。

徳吉洋二郎

そつと置く檸檬水平線動く 高橋健文
一読したときは、これ吟行句？ と思ったが、今日の稲毛の浜は波も殆どなく、穏やかであった。それを檸檬をそつと置いても動くような水平線と捉えた。緻密でスケールの大きな句である。今の世の中、何時、何が起きても不思議ではない。この穏やかな水平線みたいな世が続いてほしいとの作者の思いの一句。

新会員・会友紹介

千葉市花見川区 新江 堯子(会員)
(推薦者 山本 敏倅)
明日から大人運賃風光る
ビル街の炎暑闘魚となり抜ける
真鯛の回遊三周目のめまい

千葉市若葉区 小林 昌女(会員)
(推薦者 山中 葛子)
贈られし新米炊く香二階まで
青空の何処どこまでも今朝の秋
新しき姉の塔婆や花野原

香取市佐原 坂本 正夫(会員)
(推薦者 秋尾 敏)
健啖の箸の母なる稲穂かな

節樽の手にあるこの世鎌颯
紅吐けば仏なるべし曼珠沙華

野田市日の出町 南川 好玄(会員)
(推薦者 秋尾 敏)

遊人に断わる言葉桐一葉
仕切り合う二つの虚空木守栴
靴紐を結び見上げる櫛紅葉

千葉市稲毛区 五味ちひろ(会員)
(推薦者 羽村美和子)

ビー玉の中に満月持ち帰る
大寒やムンクの叫び海に沿う
冬薔薇マイナス五度の空が好き

千葉市稲毛区 加藤 春草(会員)
(推薦者 羽村美和子)

実梅もぐ令和の出来は筈四つ
迎へ火の明りを頼り父母が来る
湯をわかす厨の隅の虫の声

流山市駒木台 橋本志津子(会員)
(推薦者 秋尾 敏)

感染の等比数列春の雨
人心の届かぬ波紋桜桃忌
空蟬の一手に雨を引き受ける

八千代市村上 青野 友香(会員)
(推薦者 神野 紗希)

祝電の刺繍きらめき天高し
ペンだこが素敵ですねと文化祭
秋風を吸いアコーディオンの命燃ゆ

四街道市大日 加賀谷秀男(会員)
(推薦者 池田 博臣)

満天星紅葉縄文人が立っている
夏霧深し赤ちゃんは眠りいて
ゆっくりと戦艦大和海市かな

令和三年度俳句大会 作品募集中

前号の会報と一緒に「作品募集」要項を配布させて頂いてから三か月が経ちました。コロナ禍の閉塞、種々の困難な中でありながら、皆様にはお元気で過ごされたことと存じます。また、句会などへの渴望を抱きつつ御健吟なさっていることと拝察致します。

さて、過日、暇な折に『合本 現代俳句千葉 下巻』を眺めていました。そして二十三年前の会報(四十三号)の「事務局・編集部だより」の次のような記事に出会いました。

〈俳句大会の作品募集中です。少しでも多くの方に参加していただけるよう誘い合わせ下さい〉今、全く同様のことを呼び掛けたいと存じます。季節は早くも十二月。投句締切は年明けの令和三年一月三十一日です。

この俳句大会では例年、千葉県現代俳句協会賞や県知事賞、新聞社賞などの七賞に続き、優秀賞、秀逸、佳作等が計四、五十名に授与されています。また、投句された全ての作品を掲載した『俳句大会作品集』を作成、全投句者に配布致します。再び皆様の優れた作品と出会いたく、改めて「作品募集」要項をお送りしました。(会報と同封)

寒い季節がやって来ます。ご健康、ご健吟をお祈りすると共に俳句大会への応募を重ねてお願いするものです。

(大会係 高橋宗史)

小泉瀬衣子

ダンブカー海へ連なる走り梅雨
水たまりにも空と雲巴里祭
それほどにさつとは散らばらぬ船虫
虫籠の出口へ張り付いてゐたる
祭髪解く手ひらひら舞ひにけり

岡崎 翠

半歩でも踏み出して見る草の花
膝におくイラストマップ九月尽
俯瞰する摩周湖ブルー夏の夢
病院食に新米のである夕餉かな
夫といふ足長おじさん月今宵

窪田 俊作

いつもより涼しき母の忌なりけり
それはフーガで始まった終戦忌
青春には郭公の声届かない
墓効能書を立て掛ける
冬風の沖遠く征くベツトポトル

岡山 敦子

初菡背の江戸川動き出す
露の臺故郷もろともフレンチに
花の風篤姫なごりの御座所かな
天地創造雷神の空燃え盛る
寒満月背を押されて令和の道

小野 裕文

こいのぼり窓も扉もあけて留守
三世代いた家朽ちて青ぶどう
やることは天気が決める冬の朝
それぞれに葱立てているレジの列
冬満月それぞれ寝る屋根の数

神作 仁子

犬ふぐり涙はいつも新しき
切株に根が残る春の月
あめんぼは垂直思考かも知れぬ
雑巾の汚れごしごし沖縄忌
花魁草笄簪おもたかろ

岡田美美子

迷いつつ生きて桜の底力
消毒の乾く不安や春しぐれ
行く春や明日解体の店眠る
蝸牛不要不急の中をゆく
入口は大きく開けて夏に入る

小川トシ子

のどけしや戻って来ないブーメラン
どう生きる藪にもっこり茗荷の子
だしぬけに夜のみんみん本気なり
長き夜ルーペのなかの鬱の文字
異次元に迷いこみたる月の夜

尾形ゆきお

タブレットの液晶寒鯉のエネルギー
曼茶羅と思う桜を仰ぎ見る
寺に睡蓮かつて社殿は燃え落ちて
みな不安みなマスクして葡萄狩
倦怠や沼をみにきて馬をみる

佐藤 浩子

心動く平らに生きむ年はじめ
苗を植うさやぐ苦瓜眼うらに
胸躍る全き夕焼知らせ合ふ
風船蔓いしいもこの本開く
冬芽紅し核無き日本推す教皇

坂間 恒子

死はとちゅう白さるすべり吹雪く
空間をはみだしている鉄線花
木槿白花しんぶるに母のこと
蛇衣を脱ぎおり電話鳴っており
虫すだく夜の鏡に微熱あり

小林 実

遠雷や私の骨を拾う日か
三越でケーキを買った広島忌
一葉散る義清出家の動機なり
霧の朝目黒区蛇崩れ交差点
冬の旅馬に見られていらいしい

塩野谷 仁

木の実降る獣らもみな泪もつ
花野より戻るランプを置き忘れ
海見たくなりぬ林檎を真つ二つ
この星の裏側きつと星月夜
蜻蛉消え青空のまた深くなる

里見 さち

秋声や郵便受に旅の本
金木犀浮かべるためにはたづみ
どんぐりころころ君はもう青年
秋霖や松立ちつくす枯れしまま
長き夜を灯し脳内耕さむ

佐藤美紀江

里神楽父の手握り夜更まで
枯蟻螂集合場所は秘密基地
鯛雲庭に二つの犬の墓
仏壇の隣りに蜘蛛の網地震続く
秋出水買いたる本の重きかな

諸家近詠

秋の夜若さ瞬く友の夢

齋藤 溥子

紫のスーツの画家よ秋の森
病む友の花の絵はがき鳳仙花
数珠玉の群生遙か子ら遙か
青春のコトリと落ちる籠る秋

小張 直子

癌置いて真只中に夕焼ける
晩年は各駅停車秋夕焼
名月や父の居そうな雑木山
月下美人煩惱鎮めつつひらく
来し方に筋書は無し根深汁

佐久間眞城

遠近の初雪便り戦記読む
論語読みの論語知らずや冬に入る
初湯出て四股踏んでみる卒寿かな
清貧も愉しきものよ屠蘇の酔い
百寿者を目指し今年の年酒酌む

澤田 寿一

整列を星に散らしてチューリップ
涼風に小鼓打つと言う少女
ミッキーの睨みを効かす夏休み
枝豆の弾き出される書道展
冬薔薇の赤きを掴む鉄格子

重田 忠雄

かぎりなくふかき日本語座禅草
被爆図のうらは真つ白真つ平
宇宙への無限の旅や天道虫
秋彼岸此岸ソーシャルディスタンス
釈迦未生以前の地球猫の恋

冬瓜の透き通る夜の湯音かな

小多田文子

縄文の土偶に臍や秋深し
城濠を夜通し埋める虫時雨
子規の忌や赤鮮やかに鶏頭花
かなかなの道の誘い磨崖仏

國分 三徳

元旦だみんな出てこい草葉の陰
菜の花や房総半島お年頃
氏素姓それがどうした殿様蛙
三途の川遊泳禁止国交省
亀走る秋夕暮が追いかける

近藤 幸子

コロナ禍やでで虫の窓開かぬまま
曼珠沙華の真只中の昏さかな
うつし世をひととき遠く花の中
コロナ禍や夜目に新樹の匂ひけり
柿もみぢ葉の色くらべ拾ひけり

佐藤 映二

春涛の翼ひらめく余命とは
雁もどき提ぐ背にいちまいの西日
山越して変わる仕来り新豆腐
林火忌の下総梨の歯冴えかな
枯菊を焚くやチェンバロ鳴ることし

小出貴似子

仙台訛語尾のちらちら梅雨最中
ぼっかりと池より亀の晝寢覚
友手塩かけし梅酢で過ぐる夏
近道にあふるるばかり濃あじさい
コロナ禍やつくろいもの遅遅として

《会員・会友の近況》

・ 新型コロナウィルスの影響でなかなか集中出来ない毎日です。近詠の良い機会を与えて頂き有難うございました。(岡山 敦子)
・ コロナ禍のなか、三月から句会開催がない。なんとなく遠ざかる句作。六月からNet俳句に参加している。(小川トシ子)
・ 長いこと、子どもの本のよみきかせ活動と俳句の会に関わってまいりました。高齢となりましたので、今年からは俳句の方で過ごすつもりでおります。(佐藤 浩子)
・ 人に見せられないが、こんな古い句も作っている。(叩かねば吊鐘さびし露時雨)。昔疫病は殆ど不可抗力なものとされ、おおよそ死ぬ限りの人間が死に、自然に終息するのを待つしか方法を知らなかった。

(小林 実)

・ 無為徒食の余生と自分で揶揄していたが、ひよんな事から新しい趣味を始めた。月三回のレッスンで二年皆勤だったが、コロナ騒ぎで中止となり、現在は素人同好会の俳句会(通信)のみ。連衆の一人から九十四歳の誕生祝に、(秋高し目指す百歳祝い酒)の句が届いた。嬉しい。(佐久間眞城)
・ 八十八歳となりました。月一回の句会に出て元気をもらっています。お仲間も高齢となつてきました。励まし合つて句作りを続けましょう。(國分 三徳)
・ コロナ禍の今年、自分史の一環として、やや詳しい略歴を付したエッセイ小品を一書にしました。(佐藤 映二)

切株に影の屈折敗戦忌
流星の長く尾を引き寝付かれず
穴まどひひそかに昏く世の狂気
ちちろ鳴くいのちの長さ測りかね
芋虫と一期一会の寂しさよ

近藤 栄治

佐藤 禎子

杏の実重なり落ちて肺を病む
峯雲や半身すでに旅人たり
秋蟬やにわかには濁るガラス屋根
マスクして紫苑の丈の高さかな
誰彼も来て遠くなる花野かな

小林 俊子

自肅から出て回遊魚の青い秋
秋夕焼海の匂いの食卓便
ここまでおいでよ城砦の烏瓜
起き上がる河馬の鼻息秋の声
ポレロに弾む秋光の談話室

椎名 鳳人

葬ること叶わず夕立地を叩く
夕焼へ合掌・人を人怖れ
護身とは動かざること墓
駿馬なる背の稜線青風
づづづづ牛が水飲む晩夏かな

島 隆史

あの声は息子だったと羽抜鳥
人いきれ松茸山を野放途に
山門の一段ごとに秋の雨
溪流にひとつ加うる初紅葉
青田風ゴールキックの傍にいる

ホルモンに岩塩馴染む春夕焼
海抜ゼロメートルの地に水を打つ
まくなぎを抜けていよいよ真人間
遮断機の降り加速せり秋の蝶
骨太を褒められ壺に入る晩秋

越野 雄治

佐藤 鈴子

風花を掴むや無なり天守閣
更衣鮫の小紋は太古より
父に戦後風鈴吊す廊下かな
隕石のかけら転がる秋早
川霧速し畔に一列鷺の白

下村 洋子

白つばき照る静けさの浄土かな
蛇穴を出て透き通るほどの飢え
河骨や聞き分けの無いまま眠る
生家消え吾が麦秋の土けむり
しなやかに少年そのまま青すすき

島田 翠松

魯田に画鋏が落ちた転換点
大刈田みらい凶シユールに思いつきり
不死鳥と言われるなんて曼珠沙華
ピカレスク小説熟柿のころみを罨に
満月から使者納屋の白には罅

木之下みゆき

北へ向く熱き腸鳥帰る
休校で潮目が変わる金盞花
咳こぼさじとアーバンパークライン
蜘蛛の囀を破るのは夜風の骸
霧吸うたび古墳らしくなる古墳

・参加俳誌「青垣」誌上に「昭和の俳句」について書き続けており、現在は「中村草田男」論を書いています。（近藤 栄治）

・新型コロナに日常を奪われ、一年になろうとしていますが、俳句界に於いても本来の句会形式である座の文藝から文音句会へと様変わりしています。くるま座か通信句会か、それぞれ長短ありますが、外出にも神経を尖らす時代となりますと、私個人は上手下手は別として、俳句をやっているよかったです。とつくづく思う毎日です。（椎名 鳳人）

・年をとって昼寝が多く、別に病気がないのに、友達が皆いなくなり、とても淋しいです。（岡田 淑子）

「秋の吟行会」感想
・秋日和の良い一日でした。「楽しみましよう」と先生と凡の会の八人が初参加。みんなが心を一つにする集いになりました。お世話してくださる幹事様の優しい心遣いに感謝。有難うございました。（宮下 奈緒）

・秋の吟行会に初参加。穏やかな小春日に恵まれた「花の美術館」の美しい花々を鑑賞できて楽しい吟行でした。玄関に飾られたハロウインの南瓜に迎えられ、展望台から眺めた海の景色も印象に残りました。（阿部さくら）

・久々に参加の吟行会。秋の澄んだ花々に迎えられ、こんな素敵な場所が近くにあるという幸せをかみしめた一日だった。先生や仲間達と歩く楽しさに、俳句に対する緊張感を無くしていた事を少し反省。（里見 さち）

私の感銘句

浜岡 紀子

作者名 号頁

葬儀果てた猫の子をなでてゐる
初鏡妻には皺が見えてない
たてよこにしあはせのくるさくらんぼ
姿よき秋刀魚のやうに寝てみたる
世界史はおおかた戦史きぎす鳴く
偶数の安堵と愚直しやぼん玉
ねこじやらし揺れて帰らぬ人はかり
武器は要らない目の前を羽抜鶏
西口で待たされてゐる青蛙
オルガンを踏んで白鳥座の汀
初鏡妻には皺が見えてない

加齢によつて眼が見えにくくなるのはある意味天の配慮とも思えるが、人生百年ともなると物はすっかり見え方が良い。ただ手術によつて良く見えるようになり鏡に映つた自分の顔を見て泣いたという人を知つていたので、この句から奥様への思いやりが感じられ好感を持った。ほろ苦い思いと切なさがある。

島田 翠松

鴛鴦鴛鴦ただ包丁を研いでいる
ひとしきり他界の螢のまじる雪
むこう向く大ひまわりの黙秘権
乱文のあじさい乱筆の告白
夕焼けの神田西口獣道
春風よわたしを素数分解せよ
ほろほろとどの辞書も五月の痛み
信濃路に母衣の破れし敦盛草

東 國人 133 8
山中 葛子 133 8
小野 功 134 4
菊地 京子 134 4
小林 実 134 5
小野富美子 134 5
市川 唯子 134 7
川島 里子 134 7

偶数の安堵と愚直しやぼん玉
抱卵の春の重さに家出する

吉岡 一二

どんぐりの落ちてきのふの増えてゆく
氷山が崩れているんだ日和見野郎
冬の虫革命の曲の駅ピアノ
妻という不思議な器精明り
鴛鴦鴛鴦ただ包丁を研いでいる
風の木と風の黒牛明日は夏至
春祭にわたりの首しめており
夕焼けの神田西口獣道
雪の夜鶴の姿勢でキーを打つ
オルガンを踏んで白鳥座の汀

片岡伊つ美

お泊りのパンツは二枚夏休み
類想の葉ばたん普通がむずかしい
秋の海羽生えて私はかもめ
鯉幟否定も依存も無く泳ぐ
遠距離を祈るほかなき梅の花
父性とは臍の鳴く距離であり
鬼退治われも連れよと羽抜け鶏
首で歩く山鳩若葉揺れている
梅ふむむ百まで生きたら如何せむ
令和山水未生のひびき阜野に

高橋富久江

どの石も影はみ仏寒の月
人間よ僕はたんぼば戦やめよ
心音を聴く妊婦さん花の昼

木之下みゆき 135 10
下村 洋子 135 10
浜岡 紀子 132 2
松崎あきら 132 2
柳本 ゆみ 132 3
若林 佐嗣 133 7
東 國人 133 8
塩野谷 仁 134 4
岡田 春人 134 4
小林 実 134 5
高橋 宗史 135 10
清水 伶 135 11
藤岡 尚子 132 3
菊地 京子 134 4
大見 充子 134 5
椎名 鳳人 134 5
興津 恭子 134 6
黒澤 雅代 134 7
檜垣 梧樓 134 12
高橋 宗史 134 13
鈴木まんぼう 135 11
高木 一恵 135 11
若林 佐嗣 133 7
吉野 精 133 7
秋谷 菊野 133 8

永遠の欠席届鳥雲に
水切つて涼しや妻も粗板も

横須賀洋子 133 8
加藤昌一郎 134 4
小野富美子 134 5

銭湯の消えて春月残る町
人体がそつと春へとときりかわる
風薫る泣いてるなんでもつたいない
笑うしかない元日の洗濯機
晩年のさよなら幾つ秋深む
笑うしかない元日の洗濯機
一年中子供達は跳んだりはねたり、家の中でも元氣いっぱい。彼等を見守るのは親達の仕事。せめて元日位はゆつたり過ごしたい親の気持等お構いなしに動き回る。
その結果、元日から洗ひ物の山。いつものように手際よく片付ける肝つ玉母さんへ手を貸すのは洗濯機。
明るい生活感溢れた一句に魅せられました。

山崎 幸子

鞆に別の私が揺れている
この森のどこかで誰か泣く晩夏
たんぼの絮少年めざす火星
黒潮となつて臍に至りけり
霧霧霧何事もまだ起こらざる
永遠の欠席届鳥雲に
仏壇を抜け無機質な風になる
雨にすかんぼその先の雨に馬
木洩れ日や首なし地蔵に百の耳
よもつひらさか彼奴なら夕涼み
鞆に別の私が揺れている
処でも見かける子どもの遊具である。若いカツ

野口 久 132 2
細根 栗 132 2
吉野 精 133 7
秋尾 敏 133 8
山中 葛子 133 8
横須賀洋子 133 8
青木 一夫 134 4
塩野谷 仁 134 4
椎名 鳳人 134 5
越野 雄治 134 5
野口 久 134 5

ブルや昼休みなどに大人が腰かけ、少し揺らしながら仲間と話したりしている。

若い頃映画「生きる」志村喬主演に感動したことを今でも忘れない。

この作品は、揺れているぶんこだけで奥深い気持を詠み人に感じさせている。すっきりで印象的な心象句の作品である。

近藤 幸子

- シャツピとつ窓に干されし寒さかな 深山きんぎよ 132 2
- 身に刺せる僧の言葉や寒の葬 実舂 繁 132 4
- 春泥を蹴とばしてゆく十二歳 星野 一恵 132 4
- 立つために手をつく釣瓶落しかな 渡辺 澄 133 7
- 春光やエンディングノート買ってみる 飯島 昭子 133 8
- カシニョールまねて頬杖梅雨のカフェ 栗山美津子 134 5
- 青柿を洗ひ盡して雨上がる 伊藤 希眸 134 6
- 風薫るドガの踊り子靴を脱ぐ 佐々木幸子 134 7
- 控え目に老いる幸福シャボン吹く 清水 重陽 135 12
- 秋晴れや不安を隠す場所が無い 田村 麗 135 12
- 青柿を洗ひ盡して雨上がる 伊藤 希眸 135 12

夏の暑さの中で、青柿が俄雨にすっかり洗われ、雨上りの柿の木から雫を落している様子は、涼味を深く感じます。青く固い柿の面を滑り落ちる光る水滴、そして晴れ上った空の青ささえ見える、夏の雨後の爽やかさを存分に表現されました。美しいお句と感動致しました。

杉山眞佐子

- 鳥渡る裏側のなき地球かな 浜岡 紀子 132 2
- 団栗踏む何のけじめか二度三度 山崎 政江 132 4
- あしあとのうしろあしおと夏の雲 池田 博臣 133 8
- 月日貝忘れられた俳誌もある 秋尾 敏 133 8

永遠の欠席届鳥雲に

類想の葉はたん普通がむずかしい

かき氷こめかみ聳えはじめたり

難民の子らに聖夜の一冊を

兜太忌や山齡一つ加えたり

永遠の他界へ一瞬の花火

鈴木 瑩子

- 遠き日の風に逢うまで草矢打つ 細根 葉 132 2
- 絵の中になにがなんだか風の家 森村 文子 132 3
- 竜の玉いちばんきれいな陽の光 山口 彩子 132 3
- 子が走る遠心力の秋高し 水野 禮子 132 3
- 野遊びのいちにははれて書いて消す 渡辺 澄 133 7
- 記憶喪失でのひらのさくらんぼ 池田 博臣 133 8
- 立春やどの抽出しを開けようか 石井紀美子 133 8
- 可憐な金魚売なら従いてゆく 塩野谷 仁 134 4
- 歌うなら下弦の月に腰かけて 川嶋 悦子 134 4
- 楼閣の門より駱駝春疾風 岩崎 令子 134 6
- 遠き日の風に逢うまで草矢打つ 細根 葉 134 6
- 遠き日を想えば、いろんな風がありました。
- 青田風の中、母に逢いたくて一目散に歩いたこと……病院の裏庭から入ったこと……私はサナトリウムにいました。私は当時小学二年生でした。

島 隆史

- 測り疲れて尺蠖棒になって寝る 椎名 鳳人 134 5
- 遠距離を祈るほかなき梅の花 興津 恭子 134 6
- 抜き足の闇へほうたる忍び寄る 小林 俊子 134 6
- 最後尾の人を追い越す蝸牛 小池美佐子 134 7
- 風薫る泣いてるなんでもつたいない 川上 典子 135 10
- 来し方に水ゆきわたる蝸牛 高橋 健文 135 11

残雪の富士ピッコロの二重奏

シヨルターバッグ背を伸ばす秋桜

冬薔薇よ誰のものでもないわたし

返信は無用さんまは焼けており

測り疲れて尺蠖棒になって寝る

尺蠖はシャクトリムシの異名。伸びたり縮んだりして動くので愛嬌がある。作者は、何を測ろうとして疲れられたのか不明ですが、「尺蠖棒になって寝る」という表現が「測り疲れて」と響き合って絶妙な句に仕上がっていると思います。

木之下みゆき

- 十二月駅を背にして家路あり 渡辺 澄 133 7
- 両の手のいつか前足桜冷え 池田 博臣 133 8
- ひとしきり他界の螢のまじる雪 山中 葛子 133 8
- 白いマフラープロペラの音がする 加藤 法子 134 6
- ブルースカイさらさら泳ぐ竹の花 伊藤 希眸 134 6
- 抱卵の春の重さに家出する 下村 洋子 135 10
- 雪の夜鶴の姿勢でキーを打つ 高橋 宗史 135 10
- 根ではない脚だ青嶺に押し出して 高木 一恵 135 11
- 凧揚げで同齡の木に繋ぎ置く 武田 和郎 135 11
- 出航へ寄航へ白詰草を編む 杉山眞佐子 135 12
- 雪の夜鶴の姿勢でキーを打つ 高橋 宗史 135 12

掲句は昨年柏研究句会でご一緒した時、皆さんの共感を得た一句。しんしんと降る雪の音を聴きながらの作業。作者が判明した時、そうか、鶴であらせられたかと変に納得した。

今年思いも寄らなかつたコロナ騒動の中にあり、この掲句は在宅を強いられている現況をも言い得て妙である。鶴は天空で舞ってこそ鶴である。警鐘のように響いてくる一句。

津田沼研究句会報告

十月より句会時間を十三時〜十六時に変更

(於：津田沼一丁目町会会館)

第三三五回 (令和二年八月十一日)

司会 徳吉洋二郎

樹の蟬と耳に棲む蟬義兄弟 横須賀洋子
 夜の金魚新型コロナ発光す 徳吉洋二郎
 霊園の15区画の草刈る人 伊与田すみ
 西日濃し自粛の手足の置きどころ 星野 一恵
 給食は無口で終わるかたつむり 村上 澄子
 とりどりの有刺鉄線夏マスク 池田 博臣
 蛩よ大匙三分の二は嫉妬 並木 邑人
 木槿寂し主なき庭のシンフォニー なかもと淑子
 卒塔婆を抱き炎天の歩道来る 股野 久子
 吊橋の揺れる中だけ河鹿鳴く 金子 未完
 ワクチンの競り盛んなり原爆忌 高木 一恵

第三三六回 (令和二年九月八日)
 司会 徳吉洋二郎

語り部のさわり百辺つくつくし 村上 澄子
 月天心影なき人の翳りかな 池田 博臣
 テレワーク夫の居座る厄日かな 徳吉洋二郎
 筋斗雲追うて月夜のテレワーク 高木 一恵
 線香花火レム睡眠仕掛人 なかもと淑子
 親しきはフェースシールド九月来る 股野 久子
 衣食住足りないものに浮いてこい 横須賀洋子
 野菊晴れひらりと風になつてゐる 星野 一恵
 刻み食いの蕎麦四人前並ぶ 伊与田すみ

第三三七回 (令和二年十月十三日)
 司会 徳吉洋二郎

百歳の恋もありなむ鴟の晴 高木 一恵
 後の世に彼を待たせて秋刀魚に塩 横須賀洋子
 二世帯の折り合つところ金木屋 星野 一恵

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館)

第一〇七回 (令和二年七月二十三日)

司会 細野 一敏

秋灯すコロナワクチン開発室 徳吉洋二郎
 生きている証し爪銀河へのびている 吉野 精
 調弦の不揃ひもよし虫の声 股野 久子
 木犀に呼び出されたり夜の散歩 並木 邑人
 コスモスやつとにさわめく羞恥心 池田 博臣
 シヤインマスカット老母に生氣あり 伊与田すみ
 コスモスに耳打ちされる広野原 なかもと淑子
 雀蛤となる通信句会かな 増田 豊子
 天高く大人もすなるグーダッチ 村上 澄子

第一〇八回 (令和二年八月二十七日)
 司会 徳吉洋二郎

八月を探しに暗い父の書庫 石井紀美子
 霧の中誰れもが射程距離にいる 長濱 聰子
 中村哲氏のジャララバードや水澄めり 鈴木まんぼう

第一〇九回 (令和二年九月二十四日)

司会 並木 邑人

秋暑し足型記す待機位置 徳吉洋二郎
 燈火親し機転の気かぬ夫といる 細野 一敏
 空とぶ機関車月明に熟睡の子 石井紀美子
 鯨哭く艦の骸に機雷の穴 栗原 正子
 虫しぐれ音なく変はる信号機 鈴木まんぼう
 天窓の銀河螺子巻く蓄音機 長濱 聰子
 芒ゆれて機はわれのもと去りにけり 加賀谷秀男
 機が熟すボンと答えて色づく葉 三須 民恵
 思い出せば鳴る秋の風鈴 加藤 法子
 木守柿の機会均等の話は厭 小林 実
 簡潔と機知を織りこむきりぎりす 長井 寛
 中天に飛行機ひかり秋気かな 山崎 幸子
 パソコンは投機の画面小鳥来る 森井美恵子
 月天心体温計から電子音 越野 雄治
 扇風機殿へ残暑の感謝状 細根 栞
 十三夜月光に濡れシヨパン聴く 吉野 精
 ゆで卵むく秋冷の奥座敷 池田 博臣
 藪枯東南西北藪枯 矢野 忠男
 八月の後ろ姿に機首もたぐ 並木 邑人

柏研究句会報告

(於：柏市「ハックルベリー書店」2階)

●八月は休会

●第九十六回 (令和二年九月十二日)

司会 長井 寛

百日紅感染グラフィ乱高下 佐藤 鈴子
 逃げし蚊の瞬時に闇を造りけり 高橋 宗史
 汚すたびに光る言の葉繭の糸 藤好 良
 秋高しガラスを拭けばガラス消ゆ 中里 結
 赤とんぼ右か左の選択肢 岡田 春人
 罅割れの大甕ちちる鳴きしきる 橋本志津子
 地の果ても星月夜なりコロナ葬 椎名 鳳人
 殉教の島を眼下に鳥渡る 井上けい子
 天空にがさりと秋の崩れたる 下村 洋子
 三角も丸も俵も運動会 川上 典子
 冬瓜を枕にこの世漂泊す 長井 寛
 おつうも晩年夜食を欲しがりぬ 木之下みゆき

●第九十七回 (令和二年十月二十四日)

司会 岡田 春人

秋もマスクやあれこれと物言ふ日 岡田 春人
 啄木の歌吟ずる声や秋の浜 佐藤 鈴子
 鴟の贅虚空を掴み濁びおり 下村 洋子
 人慣れの秋の白鷺ポーズとる 野口 京子
 水甕という山幾つ走り蕎麦 椎名 鳳人
 剣山に刺されし芋の芽はくれない 高橋 宗史
 明けに湧く利根川霧の不敵かな 藤好 良
 さもあらむ落葉溜めたる沢の音 伊藤 希眸
 親鸞も世阿弥も仰ぐ朱鷺の舞 長井 寛
 ぶつかって鴨押し上ぐる鯉の群 中里 結
 外苑の秋雨出陣の靴音か 井上けい子
 キルト刺す一針ごとに掬う秋 川上 典子
 家族葬庄屋史実は霧の中 橋本志津子

君津研究句会報告

(於：君津市生涯学習交流センター)

●第五回 (令和二年八月六日)

司会 細野 一敏

八月や捨てし軍靴の痛痒き 加藤 法子
 青嵐一つの迷いふつ切れる 森 孝子
 帆船の百の綱鳴る青嵐 長濱 聰子
 好きですと薄墨の文字星流る 泉 志眞子
 秋暑し密避けて立つ線上に 小澤 富子
 コロナショック繰返し来る土用波 細野 一敏
 黒南風や物置小屋に迷い猫 前田 孝子
 終戦忌父の形見の下げ鞆 古賀 壽昭
 大夕焼け線路の先に消えし村 石井紀美子
 岸壁を叩く波音銀河澄む 山田たかし
 パナマ帽猫の後ろを神楽坂 徳吉洋二郎
 ねむの花育ててくれし祖母の歌 鈴木 美幸
 八月のビーグル犬の耳重し 村田 満枝
 大空へ飛ぶ術持たぬ蝸牛 羽矢 眞人
 白南風やフランス語が飛び込んでくる 馬淵 津枝
 蛩見て間氷期の夜を帰る 越野 雄治
 梅雨空や慣らし保育のごとき句会 並木 邑人
 やんわりと言うこと大事振り花 金澤 恵子

●第六回 (令和二年九月三日)

司会 長濱 聰子

銀河濃し私の一日瀟過さるる 石井紀美子
 大仰に手ぶらを詫びる黒揚羽 加藤 法子
 稲運ぶ空にゴジラが浮いており 山田たかし
 屋顔や丸いあくびの赤ん坊 田沼美智子
 ブレーキの錆音低きうろこ雲 泉 志眞子
 帳尻の合わぬ合わぬと秋簾 小澤 富子
 すすり泣くヴァイオリン箏草真つ赤 馬淵 津枝
 コロナの世崩して食べるかき氷 徳吉洋二郎

●第七回 (令和二年十月一日)

司会 細野 一敏

枝豆や立ち入りすぎる老婆心 森 孝子
 女房殿の愚痴聞いているとろろ汁 細野 一敏
 競争率100パーセント夏の草 村田 満枝
 私も友も浮塵子になつてゐる 長濱 聰子
 立ちのぼる稲の匂いや夕暮暮 鈴木 美幸
 新宿の夜の焦げ付く良夜かな 羽矢 眞人
 南総の雲と桑の実挽ぎ取りぬ 並木 邑人
 かなかなや一呼吸して夕暮れて 前田 孝子
 朋の病む癒えよと祈る法師蟬 古賀 壽昭
 キウイ切れば新星爆発青簾 越野 雄治
 コロナ禍の真最中や門火焚く 金澤 恵子

●第七回 (令和二年十月一日)

司会 細野 一敏

のひらに木の実の微熱夕日落つ 前田 孝子
 秋ともし今日で最後のバスに乗る 小澤 富子
 木の実熟れ宇治十帖の始まりぬ 徳吉洋二郎
 噛み合わぬ会話の隙間木の実降る 長濱 聰子
 鬼子母神どの子をとるか柘榴の実 泉 志眞子
 本籍地跡にマンション罫雲 森 孝子
 「ねえちゃん」と鳴く浜鴉秋思かな 田沼美智子
 留守たのむ冬瓜機嫌よく諾す 加藤 法子
 湯上りや銀河の風の尾にひたる 石井紀美子
 現代人になつて木の実踏み潰す 細野 一敏
 わだかまりなき歩幅かな木の実降る 馬淵 津枝
 諍いて負けて勝つ技木の実独楽 古賀 壽昭
 木の実独楽愛されたいだげのこと 山田たかし
 開拓のバラック住い木の実降る 村田 満枝
 「おかえり」と父親の声秋の家 鈴木 美幸
 檻の影屋に貼り付く秋暑かな 越野 雄治
 ぞうぞうと来てびらと去ぬ秋彼岸 並木 邑人
 鬼やんま相棒さらひてランデブー 金澤 恵子
 夢翔る青一枚の秋の空 羽矢 眞人

ひろば

■第百五十三回野田俳句連盟秋季大会

大会は一四三名が参加しコロナ禍を秋季文音俳句大会として実行。郵送の投句、選句過程は長い道のりとなった。(高橋宗史記)

【上位入賞者】(二句合点)代表句

- ① 水打って次の一輛待つ 駅舎 小泉 欣也
- ② 破芭蕉ひとに生き方終ひ方 鈴木 岑夫
- ③ 流灯会岸を離れぬ娘がいる 田村 隆雄
- ④ 帰省の子遺影にそっと辞令置く 山田久美子
- ⑤ 何度目の心機一転敬老日 小宮 富子
- ⑥ 原爆忌など打つても曲る釘 山中とみ子
- ⑦ 赤とんぼ飴買えぬ日の紙芝居 秋山 勝男
- ⑧ 聞き流すことも労わり遠火花 原 正治
- ⑨ 万緑を抜けたら鳥になっっている 星野 一恵
- ⑩ 赤のまま一と匙つづの離乳食 千葉 智司

図書紹介

■青麦俳句会創立四十周年記念合同句集

「麦の塔」第二集

令和二年七月刊 青麦俳句会

■句集「真水のように」 下村 洋子

令和二年八月二十日刊 本阿弥書店

涙腺をたどりて行けば罌粟の花
或る夜から小さな蛇と同居せり
惜春は鎖骨の痛みとも違う

■句集「中令」 高橋 健文

令和二年十月一日刊 東京四季出版

沖波の刃物光りや紫菀

而して至る中今桐の花
真二つに割れて冬林檎の果断

掲示板

△会員・会友異動▽

- 退会 (会員) 佐藤美奈穂
- 移転 (会員) 三浦 澄子 (東京都区より移転)
- 新会員 市岡 舜脩 (会員) 神野紗希紹介
亀山こうき (会員) 東 國人紹介

△令和二年度第三回幹事会▽

日時 令和二年八月二十五日(火) 午後一時より
場所 船橋市勤労市民センター 第1・2会議室

議題

- 一、四十周年特別事業会計報告
- 二、秋の吟行会について
- 三、令和三年度総会・俳句大会について
- 四、第一三八号会報について
- 五、現代俳句協会(本部)の動向について
- 六、各研究句会の状況について
- 七、その他

- ① 会員・会友の入退会状況
- ② 次回幹事会 十一月二十四日(火) 予定
- ③ その他

※お詫びと追加

前号一三八号、2頁下段『千葉県現代俳句集成二〇二〇』刊行に寄せての文中に漏れがありました。お詫びして、追加掲載させていただきます。

○中里 結(第4回 現代俳句協会年度作品賞) 待春の胸の高さに持つ茶碗

『二〇二〇合同句集集成』より抄出。

□ 事務局・編集部だより □

● 「令和3年度会費の免除申請」について
本年度自然災害に遭われた現代俳句協会会員に対して、来年度の会費を免除するという制度があります。申請を希望される方は、当協会事務局までご請求下さい。

なお詳細については「現代俳句」11月号37頁に掲載されていますので、ご覧下さい。

● 「私の感銘句」今年は五十九名のご参加を頂きました。来年も募集いたします。同封の要項をご参照の上、奮ってご参加ください。今号より、森井美恵子さんが編集に加わってくださり、今年最後の会報発行となりました。コロナ禍ではありましたが、秋の吟行会と皆様方の力作を掲載でき、ほっとしております。ご協力に感謝し、更なるご健吟をお祈り致します。

現代俳句千葉 第一三九号

令和二年十二月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会

会長 並木 邑人

現代俳句千葉編集部

〒278-0037 野田市野田 六七七-1-A215

木之下みゆき

千葉県現代俳句協会事務局

〒263-0043 千葉市稲毛区小仲台 七八-2818-10

羽村 美和子
TEL・FAX 〇四三-二五六-六五八四